子宮頸癌の皮膚転移の 1 例

右臀部に転移した子宮頸癌の 1 例

伊東 文行^{*1} 義澤 泉^{*1} 江川 ゆり^{*1}
服部 怜美^{*2} 小西 公麿^{*3} 菊池 三郎^{*3}

Summary

Skin metastases from internal malignancies are rare, particularly those originating from carcinoma of the cervix uteri.

A 58-year-old woman with cutaneous metastases from the cervix on her right buttock is described. She presented to our hospital with postmenopausal bleeding in 1982. Biopsy showed squamous cell carcinoma *in situ* of the cervix uteri. She was treated by total hysterectomy with bilateral lymphadenectomy. She came to our clinic on Dec. 2, 1991 with a red-colored, hard, painful, dome-shaped nodule on her right buttock of one year's duration. Histopathological and clinical examination revealed that the tumor was metastatic squamous cell carcinoma from the cervix uteri.

緒 言

内臓癌の皮膚転移は比較的稀なものとなれ、特に子宮頸癌の皮膚転移は稀といわれている。我々は子宮頸癌と診断され、10年の後、右臀部に転移を生じた症例を経験したので症例を供覧し、若干の考察を加えて報告した。

症 例

患 者：58歳，女性
初 診：1991年12月 2 日
主 訴：右臀部の腫瘍。

家族歴：特記すべきことなし。

既往歴：1982年子宮頸部の上皮内癌で子宮全摘術を受けている。

現病歴：約 1 年前から右臀部の自覚症状のない丘疹に気が付いていたが放置していた。その後徐々に大きさを増し、1 週間前から疼痛を伴うようになり皮膚科紹介となった。

初診時現症：右臀部に20×20mmの硬い扁平ドーム状の紅色腫瘍が認められ、疼痛を伴っていた。下床との癒着はみられなかった(図1)。

婦人科病歴：1982年 6 月，不正性器出血のため当院婦人科を受診した。スメアテストでclass IV，コルコスコピーで異型の血管像がみられたため生検を施行，子宮頸部の上皮内癌と診断され，単純子宮全摘術，付属器切除および骨盤リンパ節郭清術を受けた。その後は外来で経過観察していたが，1989年 6 月，性器出血のため入院，腔断端部に扁平上皮癌が認められたため再発と考え放射線治療を受けた。1991年12月，貧

^{*1}Fumiyuki ITO, Izumi YOSHIZAWA, Yuri EGAWA：日本医科大学第 2 病院皮膚科

^{*2}Satomi HATTORI：日本医科大学付属病院皮膚科

^{*3}Kimimaro KONISHI, Saburo KIKUCHI：日本医科大学第 2 病院産婦人科

図1. 右臀部の紅色腫瘍

図2. 子宮頸部の組織像 (H.E.染色)

図3. 子宮頸部の組織像 (H.E.染色)

血治療，全身精査の目的で再度入院となる。

病理組織学的所見：子宮全摘時の子宮頸部の組織；頸部の粘膜上皮は多数の細胞分裂像を含む異型性の強い細胞で占められ，一部に角化が認められる。基底膜は保たれているところが多いが，一部に腫瘍細胞の下方への浸潤が認められる。また，基底膜下にはリンパ球を中心とした小円形細胞浸潤がみられる（図2，3）。

右臀部の紅色腫瘍の組織；表皮には著変がなく，真皮中層から皮下組織にかけて多数の島状，索状を呈する腫瘍巣が認められる。腫瘍細胞には強い異型性がみられ，多数の細胞分裂像とともに角化も認められる（図4，5）。

以上の臨床像，経過および病理組織学的所見より右臀部に生じた紅色腫瘍は子宮頸癌の皮膚転移（扁平上皮癌）と診断した。

全身検索：骨シンチにより肋骨，仙腸関節に異常集積像が認められ，骨転移が示唆された（図6）。注腸造影では直腸に腫瘍塊とS状結腸・脛

図4. 右臀部紅色腫瘍の組織 (H.E.染色)

図5. 右臀部紅色腫瘍の組織 (H.E.染色)

瘻がみられた（図7）。皮膚では左側の外陰部，下腹部，鼠頸部から大腿にかけて紅色丘疹および浸潤性紅斑が出現し次第に範囲が広がってきていた（図8）。

図6. 骨シンチ像

図7. 注腸造影所見

図8. 左側下腹部から大腿部の臨床像

過は早いといわれている。Malfetano⁴⁾によると平均3ヵ月で死に至ると述べられており、文献的には転移後の生存期間の最長は19ヵ月と述べられている⁵⁾。

今回我々の経験した症例も子宮頸癌の皮膚転移の診断確定後6ヵ月、右臀部の皮疹に気付いてから1年6ヵ月で全身状態が悪化し死亡した。

子宮頸癌の皮膚転移例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告した。

文 献

- 1) Healey, P. M., Malott, K. and Chalet, M. D.: Cancer of the skin: Cancers metastatic to the skin., Friedmann, R. J., Rigel, D. S., Kopf, A. W., et al., W. B. Saunders Company, Philadelphia, 1991, 347-363.
- 2) Brady, L. W., O'Neill, E. A. and Farber, S. H.: Unusual sites of metastases. Semin. Oncol., 4: 59-64, 1977.
- 3) 関場香, 小橋勇二: 悪性腫瘍の転移: 子宮頸癌の転移と取り扱い, 産科と婦人科, 6: 929-933, 1991.
- 4) Malfetano, J. H.: Skin metastases from cervical cancer: A Fatal Event, Gynec. Oncol., 24: 177-182, 1986.
- 5) Gino, F., Giovanni, M., Luca, M., et al.: Cutaneous metastases from carcinoma of the cervix. Tumori., 76: 410-412, 1990.

考 案

悪性腫瘍の皮膚転移は比較的稀なものとされ、女性の悪性腫瘍の原発巣としては乳癌、大腸癌、悪性黒色腫、卵巣癌、肺癌の順に多く、乳癌の69%を除いては頻度は低い¹⁾。

Bradyら²⁾による子宮頸癌患者の皮膚転移の頻度は0.1%という報告や、関場ら³⁾の1652例の子宮頸癌患者の経過観察中に皮膚転移を認めたのは1例のみという報告をみても子宮頸癌の皮膚転移は非常に稀と思われる。さらに、子宮頸癌の皮膚転移の特徴として皮膚転移出現後の経